

# 日本古代の放鷹の技術と形象に関する覚書（その五）

—陸奥国鷹取の男の観音靈験譚から—

秋吉 正博

A Note on Techniques and Images of Hawking and Falconry in Ancient Japan (part 5)

AKIYOSHI, Masahiro

## 一、はじめに

本稿までの経緯としては、日本古代の放鷹の技術の一端を読み取れる史料を取り上げ、放鷹にまつわる伝承としての側面を重視することで、史料上の空想的な要素を意識しながら、放鷹の担い手の身分とその環境に注目して、放鷹の技術的な要素とその背景を読み解くことを試みてきた。その四の稿では、平安期の餌取法師往生説話に注目した。放鷹に係する餌取の活動に依存して食物を得ていた法師たちの存在を手掛かりに、餌取に関する先行研究を参照しつつ、奈良・平安期の放鷹を支えた餌取について考えてみた<sup>(1)</sup>。

本稿では、前稿で注目した平安期の餌取法師往生説話とほぼ同

時期に作られて普及した鷹取の男の観音靈験譚に注目する。奈良・平安期で放鷹のための鷹を飼育調教する人々は鷹飼と呼ばれていたが、その鷹を捕獲する鷹取と呼ばれる人々も存在していたことが該当の観音靈験譚からうかがえる。

この観音靈験譚の類話はいくつかあり、いずれの話も放鷹に関わる生業を営む男が、日頃から観音経（観音品とも呼ばれる。妙法蓮華経・観世音菩薩普門品第二十五を意味する）を読んで信仰していたが、生業の中で生命の危機に直面した時、観音菩薩に祈ると、その危機を脱することができたという話である。平安期の鷹取の男の観音靈験譚を手掛かりに、鷹取・鷹飼に関する先行研究を参照し、奈良・平安期の放鷹を支えた鷹取・鷹飼の生業・生活の一端を考えてみたいと思う。

## 二、鷹取の男の観音靈驗譚

古代の放鷹に関する史料のうち、鷹の捕獲について読み取れる史料を取り上げる前に、鷹の捕獲をモチーフとした説話に注目してみたい。その説話は、十一世紀前半成立の『大日本国法華経験記』をはじめとして、平安後期・鎌倉期に成立した複数の説話集にみえる鷹取の男の観音靈驗譚である。これらの観音靈驗譚の大筋は、鷹の子（雛）を取ることを生業としていた男が、日頃から毎月十八日に観音品を誦持していたが、そのおかげで生命の危機を脱したという話である。該当の観音靈驗譚のテーマは一貫して変わらないため、説話の本筋を論じるときには、各説話集の間で共通する観音靈驗譚の特徴を明らかにすることが優先されるのは当然であろう。その観点からすると、各説話集から読み取れる生業・生活の様子の違いは、取るに足りない、ささいな違いに過ぎないかもしれない。しかし、彼らが観音経を持って観音菩薩を信仰しながら、鷹の子を取って売る仕事に従事して生活を成り立たせていたと考えるとき、平安期の多様な社会生活をうかがううえで一つの素材を提供するものといえる。

複数の説話集で説明されていた鷹取の男の生業・生活の様子は少しずつ異なっている。一例を挙げると、『大日本国法華経験記』では、陸奥国に住む鷹取の男が鷹の子を取って「国家」へ献上し

ており、価値を得ていたとあるのに対して、『今昔物語集』では、『大日本国法華経験記』をもとに改変しており、陸奥国の鷹取の男は鷹の子を取って「要ニスル人」、「国ノ人」へ与えて価値を得ていた、と説明されている。『大日本国法華経験記』と『今昔物語集』における陸奥国の鷹取の男の生業・生活の違いが、平安期の国家・社会の変化の一端を示していたと推考する説があった。

古代国家の鷹貢納制度について詳しく論じた弓野正武氏は、『大日本国法華経験記』と『今昔物語集』の陸奥国の鷹取の男が鷹の子を売る相手の違いに注目された<sup>20</sup>。この違いを一つの手がかかりとして平安期の様々な史料を取り上げており、古代国家の鷹貢納制度が平安前・中期から平安後期へかけて次第に衰退するに従い、私的な放鷹が隆盛していくという中世的な放鷹への変化を見通すものであった。古代国家の鷹貢納制度の衰退と放鷹を取り巻く社会の変化に関する見解に対して異論を述べる用意がないものの、鷹取や鷹飼など放鷹に従事した人々に対する理解には少々疑問がある。所論の手がかりとされた、『大日本国法華経験記』と『今昔物語集』の説話にみえる鷹取の男の生業・生活に注目すると、もう少し読み解く余地があるように思う。

やや迂遠な論じ方になるが、まず、鷹取の男の観音靈驗譚に関する文学研究の成果を参照して、観音靈驗譚にみえる鷹取の男の生業・生活の様子を改めて読み解くことが重要であろう。該当の観音靈驗譚は、平安後期・鎌倉期に成立した複数の説話集に収録

されており、文学研究における当該説話の系統に関しては、森正人氏による整理がある<sup>(3)</sup>。次の系統に分かれるという。

#### A系統

『大日本国法華経験記』卷下・第一一三 奥州鷹取男

『今昔物語集』卷十六・第六 陸奥国鷹取男依観音助存命語

唐招提寺蔵「取鷹母縁」(取鷹因縁)

#### B系統

『宇治拾遺物語』上・八七 観音経化レ蛇輔レ人給事

『古本説話集』下・六四 観音経変ニ化蛇身ニ輔ニ鷹生ニ事

#### C系統

金沢文庫本『観音利益集』三五

これらのうち、A系統の唐招提寺蔵「取鷹母縁」(取鷹因縁)については、A系統の基点となった『験記』をもとに、僧侶によって抜き書きされた説草として唐招提寺に伝来したことから、僧侶が好んで該当の説話を説法・説教に取り上げたのであろうと推測されている。C系統の金沢文庫本『観音利益集』三五もまた同様に、称名寺に伝わる説草であった可能性を指摘されているが、説話の内容が全体としてはA系統であるものの、鷹取の男が鷹の巢へ降りる方法が異なることなど、A系統との間に異同があると判断してC系統に分類している。

森氏は、『大日本国法華経験記』の鷹取の男の観音靈験譚を軸に、他の説話集の類話を比較して古代中世人の心性を読み取りつつ、

説話の特徴について考察されている。特に大蛇との遭遇の場面を詳細に読み解き、説話の読み手や聞き手を意識して形作られた説話のもつ力を論じておられる。読み手や聞き手が自身を説話の中の人物に重ね合わせて宗教的な真実を感得するに至るだろうと強調されている。

説話そのものに期待された効果は所論の通りと考えるが、所論の重点は、鷹取の男が断崖で生命の危機に直面した時に大蛇と遭遇して危機を脱し、そのことが観音の靈験であったと説き明かしている説話の後半部分にあった。説話の後半部分は複数の説話集の間で共通する要素が多いのだが、後半部分にいたるまでの前半部分は、系統の違いによって異なっていることが注目できる。

本稿の行論の都合上、当該説話の内容を大まかに把握しておくため、A系統の『大日本国法華経験記』の当該説話をもとに作られた『今昔物語集』の類話の概略を紹介しておく。

・陸奥国に住む鷹取の男は、鷹の巢から鷹の子を下ろして、必要とする人へ売ることので生計を立てていた。例年、鷹取の男によって子を奪われていた母の鷹は、巢を捨てて飛び去り、海辺の断崖へ懸かって伸びる木の枝に新しい巢を作った。

・鷹取の男は、いつもの巢から消えた鷹を探して山々峰々を歩き回り、断崖に新しい巢を見つけたが、その場所に近づけず、帰宅して隣家の男に嘆いた。隣家の男の助言を得て籠などを用意すると、二人で断崖を訪れた。鷹取の男は籠に乗り込むと、隣家の男

に頼んで籠を鷹の巢の近くに下ろしてもらった。鷹取の男は巢から鷹の子を取って籠に載せたが、隣家の男は籠を引き上げると鷹の子を持って立ち去ってしまう。断崖の途中に取り残された鷹取の男は、いつまで待っても籠が下りてこないため、海に落ちないように巖のくぼみに身を寄せて、身動きが取れなくなり、死を覚悟した。

・鷹取の男は隣家の男を恨むでもなく、自分の生業の罪深さゆえに苦境に陥ったと悔いて、毎月十八日に読んでいた観音品を思い出し、観音菩薩に祈った。すると、崖下の大海の中から大蛇が出現して崖を登ってきて、鷹取の男を呑もうとした。鷹取の男は腰の刀を手に持ち、大蛇の頭に突き立てる。大蛇が驚いて崖を登ろうとしたので、鷹取の男は刀の柄を握ったまま大蛇に乗り、崖の上に引き上げられた。大蛇は崖の上で忽然と姿を消す。鷹取の男は衰弱していたが、帰宅すると、妻子にその出来事を語った。

・いつものように十八日になり、持斎沐浴して、観音品を納める筈を開くと、経の軸に刀が刺さっていた。大蛇は観音品の化身であったと知り、たちまち道心を発して法師となった。

この説話の概略は以上であるが、テーマが観音靈験譚であるから、森氏の研究をはじめとして、『大日本国法華経験記』や『今昔物語集』の注釈でも、鷹取の男が断崖で大蛇と遭遇して生命の危機を出した場面に注目が集まっている。大蛇との遭遇や観音の靈験自体は現実的に理解し難いものだが、その場面と靈験の意味を

効果的に説くために、鷹取の男が断崖で一人になり、大蛇と遭遇するという特殊な状況を設定している。説話の後半部分で観音の靈験を説く効果を高めるには、特殊な状況の前提となった様々な要素も重要であろう。この説話の前半部分は、後半部分の前置きとして、鷹取の男が営んでいた生業・生活の様子から、断崖で一人になって大蛇と遭遇した経緯に至るまで、説話の読み手または聞き手が違和感を覚えたとしても想像しやすいように書かれていると予想される。例えば、鷹取の男が断崖で大蛇に遭遇したという場面は、生き延びた彼自身の語りに基づいているらしく、その場面を実際に目撃した者は誰も存在していなかった。説話の作者または説話集の編者が、説話の前半部分の設定と表現を工夫して、鷹取の男が断崖で一人になった経緯を上手く説明することが求められていたといえる。

本稿では、そのような問題関心に立ち、類話を比較して、鷹取の男の生業・生活の様子を読み比べてみる。比較の手掛かりとして、鷹取の男が断崖で鷹の子を取ろうとするに至った具体的な状況を読むことから始めよう。以降は書名を掲げることとは煩雑になるため、それぞれ略称を用い、『大日本国法華経験記』は『験記』、『今昔物語集』は『今昔』、『宇治拾遺物語』は『宇治』、『古本説話集』は『古本』と表記する。A系統の代表的な説話集として『験記』、『今昔』、B系統の説話集として『古本』、『宇治』を取り上げ、それぞれの該当の説話の前半部分を中心に引用する。ただし、該

当の観音靈驗譚の大元になったA系統の『驗記』は、原文の全部を掲げておく。A系統の唐招提寺蔵「取鷹母縁」（取鷹因縁）とC系統の金沢文庫本『観音利益集』三五は、A系統について考える際に参照するにとどめ、ここには掲げない<sup>(4)</sup>。『驗記』、『今昔』、『宇治』、『古本』の順に並べ、『驗記』、『今昔』と『宇治』、『古本』の間の違いを比較していくことにしたい。

・『驗記』卷下・第一二三 奥州鷹取男<sup>(5)</sup>

陸奥国有一人、姓名未詳、田獵漁捕、取鷹為業、常取上鷹、為活生謀、雌鷹思念、我常遲年、造巢生卵成雛、人来奪取、子孫既絶、誰復繼胤、今生卵不令知人、作是念已、尋求人跡不通險処、造巢生卵、離前々巢、飛到峨峨石巖涯岸、下臨大海、青水浩々、上臨虚空、白雲眇々、其岸中央有小凹所、造巢生子、

時鷹取男走求無在所、経多日求得鷹巢、非人住処、非力所堪、見已還家、歎生活絶、我常取鷹、献上国家、以其価直宛年々貯、今年既絶取鷹方術矣、往傍人許、語此巢事、傍人告言、当相構取、於彼岩上打立梯杙、以数百余尋繩、結付梯杙、以繩末繫箒、鷹取乗箒中、令人執繩、漸々垂下、遙到巢許、鷹取從箒下居巢傍、先取鷹子、結羽裹雛、入是箒中、先举鷹子、上人引上箒、取領鷹子、又不下箒棄捨而去、往鷹取宅語妻子言、汝夫乗箒、下巢去間、繩断遙落海中而死、妻子悲泣、親昵歎息、

鷹取居巢、待箒欲登、既箒不下、経数日夜、居狭凹巖、若動身体、可顛入海、只待死期、覩身罪報、此男頃年每月十八日、持斎

精進、誦法華經第八卷矣、鷹取遇苦念觀音、更無他念、我年来間、取飛翔鷹、足着絆縛不放、依如是罪、現身感得如是重苦、大悲觀音、拔地獄苦、引摂浄土、有大毒蛇、從海中出、向岩登来欲呑、鷹取拔刀突立蛇頭、蛇驚走登、鷹取乗蛇、自然至岸上、蛇隱不見、即知觀音變蛇、来助我、一心礼拝、嘆未曾有矣、

往至我宅、死去七日、立物忌札、閉門無人、開戸入居、妻子揮淚、喜還来事、近隣遠近、称稀有事、乃至例十八日沐浴持斎開箱見経、々軸立刀、蛇頭突立刀也、明知法華第八、變蛇来救我、弥生歡喜、重發道心、出家入道、受持法花、永断惡心焉、

・『今昔』卷十六・第六 陸奥国鷹取男依觀音助存命語<sup>(6)</sup>

今昔、陸奥国ニ住ケル男、年来鷹ノ子ヲ下シテ、要ニスル人ニ与ヘテ、其ノ直ヲ得テ世ヲ渡リケリ。鷹ノ櫟ヲ食タル所ヲ見置テ、年来下ケルニ、母鷹此ノ事ヲ思ヒ詫ビケルニヤ有ケム、本ノ所ニ櫟ヲ不食ズシテ、人ノ可通ベキ様モ無キ所ヲ求メテ、櫟ヲ食ヒテ、卵ヲ生ミツ。巖ノ屏風ヲ立タル様ナル崎ニ、下大海ノ底中モ不知又荒磯ニテ有リ。其レニ遙ニ下テ生タル木ノ大海ニ差覆ヒタル末ニ生テケリ。実ニ人可寄付キ様無所ナルベシ。

此ノ鷹取ノ男鷹ノ子可下キ時ニ成ニケレバ、例櫟食フ所ヲ行テ見ルニ、何シニカハ有ラムズル。今年ハ櫟食タル跡モ無シ。男此レヲ見テ、歎キ悲デ、外ヲ走り求ルニ、更ニ無ケレバ、「鷹ノ母ノ死ニケルニヤ。亦、外ニ櫟ヲ食タルニヤ」ト思テ、日来ヲ経テ、山々峰々ヲ求メ行クニ、遂ニ此櫟ノ所ヲ幽ニ見付テ、喜ビ乍ラ寄

テ見ルニ、更二人ノ可通キ所ニ非ズ。上ヨリ可下キニ、手ヲ立タル様ナル巖ノ喬也。下ヨリ可登キニ、底中モ不知又大海ノ荒穢也。鷹ノ櫟ヲ見付タリト云ヘドモ更ニ力不及ズシテ、家ニ返テ、世ヲ渡ラム事ノ絶ヌルヲ歎ク。

而ルニ、隣ニ有ル男ニ此ノ事ヲ語ル。「我レ常ニ鷹ノ子ヲ取テ、国ノ人ニ与ヘテ、其ノ直ヲ得テ、年ノ内ノ貯ヘトシテ年来ヲ経ツルニ、今年既ニ鷹ノ櫟ヲ然々ノ所ニ生タルニ依テ、鷹ノ子ヲ取ル術絶ヌ」ト歎クニ、隣ノ男ノ云ク、「隣ノ男ノ云ク、「人ノ構ヘバ、自然ヲ取り得ル事モ有ナム」ト云テ、彼ノ櫟ノ所ニ二人相ヒ具シテ行キヌ。其ノ所ヲ見テ、教フル様、「巖ノ上ニ大ナル櫟ヲ打立テ、其ノ櫟ニ百余尋ノ縄ヲ結び付テ、其ノ縄ノ末ニ大ナル籠ヲ付テ、其ノ籠ニ乗テ櫟ノ所ニ下テ可取キ也」ト。

鷹取ノ男此レヲ聞テ、喜テ家ニ返テ、籠・縄・櫟ヲ調ヘ儲テ、二人相ヒ具シテ櫟ノ所ニ行ヌ。支度ノ如ク櫟ヲ打立テ、縄ヲ付テ籠ヲ結び付テ、鷹取其ノ籠ニ乗テ、隣ノ男縄ヲ取テ漸ク下ス。遙ニ櫟ノ所ニ至ヌ。鷹取籠ヨリ下テ櫟ノ傍ニ居テ、先ヅ鷹ノ子ヲ取テ、翼ヲ結テ籠ニ入レテ、先ヅ上ゲツ。我ハ留テ、亦下ム度ビ昇ラムト為ル間、隣ノ男籠ヲ引上ゲテ、鷹ノ子ヲ取テ、亦籠ヲ不下シテ、鷹取ヲ棄テ、家ニ返ヌ。鷹取ガ家ニ行テ、妻子ニ語テ云ク、「汝ガ夫ハ、籠ニ乗セテ然々カ下シツル程ニ、縄切レテ海ノ中ニ落テ死ヌ」ト。妻子此レヲ聞テ、泣キ悲ム事無限シ。

鷹取ハ櫟ノ傍ニ居テ、籠ヲ待テ昇ラムトシテ、今ヤ下ス下スト

待ニ、籠ヲ不下シテ日来ヲ経ヌ。狭シテ少シ窪メル巖ニ居テ、塵許モ身ヲ動サバ、遙ニ海ニ落入ナムトス。然レバ、只死ナム事ヲ待テ有ルニ、年来此ク罪ヲ造ルト云ヘドモ、毎月十八日精進ニシテ、観音品ヲ読奉ケリ。爰ニ思ハク、「我レ年来飛ビ翔ケル鷹ノ子ヲ取テ、足ニ緒ヲ付テ繫テ居ヘテ不放ズシテ、鳥ヲ令捕ム。此ノ罪ニ依テ、現報ヲ得テ、忽ニ死ナムトス。願クハ大悲観音、年来持奉ルニ依テ、此ノ世ハ今ハ此クテ止ミヌ、後生ニ三途ニ不墮ズシテ、必ず浄土ニ迎ヘ給ヘ」ト念ズル程ニ、大ナル毒蛇、目ハ鏡ノ如クニシテ、舌嘗ヲシテ、大海ヨリ出デ、巖ノ喬ヨリ昇リ来テ、鷹取ヲ呑ママトス。(後略)

・『宇治』上・八七 観音経化レ蛇輔レ人給事(一)

今は昔、鷹を役にて過る物有けり。鷹の放れたるをとらんとて、飛にしたがひて行ける程に、はるかなる山の奥の谷の片岸に、高き木のあるに、鷹の巣くひたるを見付て、いみじき事見置きたると、うれしく思て、帰てのち、いまはよき程に成ぬらんとおぼゆる程に、子をおろさんとて、又、行て見るに、えもいはぬ深山の深き谷の、そこみも知らぬうへに、いみじく高き榎の木の、枝は谷にさしおほひたるが上に、巢を食て子をうみたり。

鷹、巢のめぐりにしありく。見るに、えもいはずめでたき鷹にてあれば、子もよかるらんと思て、よろづも知らずのぼるに、やう／＼、いま巢のもとにのぼらんとする程に、踏まへたる枝折れて、谷に落ち入ぬ。谷の片岸にさし出でたる木の枝に落かゝりて、

その木の枝をとらへてありければ、生たる心地もせず。すべき方なし。見おるせば、そこゝも知らず、深き谷也。見あぐれば、はるかに高き岸なり。かきのぼるべき方もなし。

従者どもは、谷に落入ぬれば、うたがひなく死ぬならんと思ふ。さるにても、いかゞあると見んと思て、岸の端へ寄りて、わりなく爪立てて、おそろしけれど、わづかに見おるせば、そこゝも知らぬ谷の底に、木の葉しげくへだてたる下なれば、さらに見ゆべきやうもなし。目くるめき、かなしければ、しばしも見えぬ。すべき方もなければ、さりとしてあるべきならねば、みな家に帰りて、かう／＼といへば、妻子ども泣まどへどもかひなし。あはぬまでも見にゆかまほしけれど、「さらに道もおぼえず。又、おはしたりとも、そこゝも知らぬ谷の底にて、さばかりのぞき、よろづに見しかども、見え給はざりき」といへば、「まことにさぞあるらんと人、もいへば、行かずなりぬ。

さて、谷には、すべき方なく、石のそばの、折敷のひろさにてさし出たるかたそばに尻をかけて、木の枝をとらへて、すこしも身じろぐべきかたなし。いさゝかもはたらかば、谷に落入ぬべし。いかにも／＼せん方なし。かく鷹飼を役にて世をすぐせど、おさなくより観音経を読奉り、たもち奉りたりければ、「助給へ」と思入て、ひとへに憑奉りて、此経を夜昼、いくらともなく読み奉る。(後略)

・『古本』下・六四 観音経変ニ化蛇身ニ輔ニ鷹生ニ事(8)

今は昔、鷹を役にて過ぐる物ありけり。鷹の放れたるを取らんとて、飛ぶに従ひて行きける程に、遙かに往にけり。鷹を取らんとて見れば、遙かなる奥山の、谷の片岸に、高き木に、鷹の巢食ひたるを見置きて、「いみじきこと見置きたる」と思ひて、「今はよき程になりぬらん」と思ふ程に、この鷹の子下しに往にけり。えもいはぬ奥山の、深き谷、底も知らぬに、谷の上に、いみじく高き榎の木の、枝は谷にさしおほをりたるが上に巢を食ひて、子を生みたり。

この子を生みたるが、この巢のめぐりにし歩く。見るに、えもいはずめでたき鷹にてあれば、「子もよかるらん」と思ひて、よろづも知らず登る。やう／＼かき登りて、今、巢のもとに登らんとする程に、踏まへたる枝折れて、谷に落ち入りぬ。谷の底に、高き木のありたる枝に落ちかゝりて、その木の枝をとらへてありければ、生きたる心地もせず。我にもあらず、すべき方もなし。見下せば、底も知らず深き谷なり。見上ぐれば、遙かに高き木也。かき登るべき方もなし。

供にある従者どもは、谷に落ち入りぬれば、「疑ひなく死ぬる」と思ふ。「さるにても、いかゞあると見む」と思ひて、岸のもとに寄りて、わりなく爪立てて、恐ろしければ、わづかに見入るれど、底も知らぬ谷の底に、木の葉繁き下枝にあれば、さらに見ゆべきやうもなし。目くるめく心地すれば、しばしも見えぬ。すべき方もなければ、さりとしてあるべきならねば、家に行きて、かう／

と言へば、妻子ども泣き惑へども、かひもなし。会はぬまでも、見に行かまほしけれど、「さらに道もおぼえず。又をはしたりと、底ぬも知らぬ谷の底にて、さばかりのぞき、よろづは見しかども、見え給はざりき」と言へば、「まことにさぞあるらん」と人々もいへば、え行かず。

あの谷には、すべき方もなく、石の稜の、折敷の広さにてさし出でたる片稜に、尻を掛けて、木の枝を捉へて、少しもみじろぐべき方もなし。いさゝかもはたらかば、谷に落ち入りぬべし。いかにも／＼すべき方もなし。かくてぞ、鷹飼ふを役にて世を過ごせど、幼くより観音経を読みたてまつり、たもちたてまつりたりければ、「助け給へ」と思ひ入りて、ひとへに頼みたてまつりて、この経を夜昼いくらともなく読みたてまつる。(後略)

A系統の『験記』、『今昔』とB系統の『宇治』、『古本』の間で比較すると、男が鷹の巣を探していた時期の違い、男が見つけた鷹の巣の場所の違い、男が巣から鷹の子を下ろす方法の違い、などの男たちの行動上の違いがあることに注目できる。

一つ目は、男が鷹の巣を探していた時期の違いである。

『験記』や『今昔』では、鷹取の男は、いつもの巣から鷹がいなくなつたことに気づき、山々峰々を歩き回り、その鷹の新しい巣を探して見つけているが、鷹がいなくなつたと気づいた時期から同じ鷹の新しい巣を見つけた時期までは、それほど間を置いていないようであり、いずれも鷹を取るのに適した季節であつた。

『宇治』には男が「鷹の放れたをとらんとて、鷹の飛にしたがひて行ける程に」とあるように、『宇治』や『古本』では、男は放鷹で用いた鷹が逃げてしまい、その鷹を探しているときに、別の鷹の巣を偶然見つけたのではなからうか。男が巣を見つけたときに近づくかず、鷹の子を取らなかつたのは、巣の中に鷹の子がいなかつた可能性が高いからであらう。男が鷹を放鷹に用いた時期は、鷹の繁殖期ではなかつたといえる。その後、「いまはよき程に成ぬらん」と思える時期、すなわち鷹の繁殖期を待つてから、巢へ近づいたということが明記されている(9)。

二つ目は、男が見つけた鷹の巣の場所の違いである。

『験記』では、雌の鷹が例年営んでいた巣の場所の特徴は全く書かれていないのに、雌の鷹が「思念」したこと、すなわち、雌の鷹が頭の中で考えたことまで想像して書かれている。雌の鷹は鷹の子を鷹取の男によつて取られないように、人の寄り付かない峻険な場所を探して新しい巣を作つた、と説明されている。その峻険な場所とは、大海のそばの断崖の中央の凹んだところであつた。『今昔』は『験記』と少し異なっており、「母鷹」が新たに巣を作つた場所は大海の荒磯にのぞむ崖であるが、崖の下方で生えた木から海へ懸かるように伸びた枝に巣を作つたという。

『宇治』、『古本』では『今昔』の木を踏襲しているが、木の生えていた場所が異なっている。『宇治』では、「鷹を役にて過る物」が山奥の深い谷の岸に生えた榎の木に鷹の巣を見つけた。鷹の巣



の場所は、榎の木から谷へ懸かるように伸びた枝にあった。『古本』もほぼ同様である。『今昔』では鷹の巢のあった木の種類が書かれていないが、『宇治』と『古本』では榎の木と特定している。榎の木と特定した理由は定かではないが、崖の上でも生える木の種類として選ばれた可能性がある。

三つ目は、男が巢から鷹の子を下ろす方法の違いである。

『験記』では、男はいつも一人で鷹の巢を探して鷹の子を取っていたようだが、新たな巢のある崖の中央のくぼみ辺りへ下りることは、彼一人では難しいことであった。男は隣家の男の助言と協力を得て、箒や縄などを用いて工夫し、二人がかりで協力して鷹の子を取ろうとした。『今昔』でも同様である。鷹取の男は通常なら一人で鷹の子を取っていたので、生命の危機に陥ることも滅多になかったといえるだろう。新たな巢が峻険な場所に見つかったという事態を受け、鷹取の男が隣家の男と二人がかりで鷹の子を取ることができたにも拘わらず、一人で崖の中央に置き去りにされてしまう、という特殊な状況を作り出している。鷹取の男の普段の仕事ぶりを想定したうえで考えると、『験記』、『今昔』で「隣人型」のモチーフを採用した理由は首肯し得るところである。

『宇治』や『古本』では、男は山奥の谷で見つけた鷹の子を取るために、「従者ども」を引き連れて向かったが、「従者ども」に命じて鷹の子を取らせたのではなく、自ら谷の岸に生えた榎の木に登って巢へ近づこうとした。男は木の枝に足をかけた時に枝が

折れてしまい、谷底へ向けて転落したという。男が万全の態勢を整えて鷹の子を取ろうとしたとはいえないであろう。男が谷底へ転落して、その姿が見えなくなったということは、谷の岸に取り残された「従者ども」によって確認されている。

三つの観点からA系統の『験記』、『今昔』の陸奥国の鷹取の男とB系統の『古本』、『宇治』の鷹を役にて過ごす男との行動上の違いを指摘したが、それらの違いは、男たちの生業・生活に対する設定の変更と表現上の工夫に関連していた。

A系統の『験記』、『今昔』にみえる鷹取の男の仕事とは、山々峰々に分け入って鷹の巢を探し回り、巢を見つけると、その場所を把握しておくこと、そして、巢の中で卵から雛が孵る頃合いに、巢から雛を取って下ろすことであった。男が巢から雛を取るときは作業の様子もわかる。『験記』では、男が巢から鷹の子を取り出すときに、羽を結わえたいうえで鷹の子を裏んでから、籠に入れたという。裏むどきに用いたものは不明である。鷹の子が籠の中で羽ばたいて暴れると怪我をするため、鷹の子の怪我を防ぐ配慮であろう。鷹取の男は、基本的に一人で活動しており、危険な場所へ近づかない慎重な人物であることもうかがえた<sup>(10)</sup>。

B系統の『宇治』には、男の説明として「鷹を役にて過る物」とあり、『古本』にも「鷹を役にて過ぐる物」とあるように、「鷹取」と明記していないことが注目される。『宇治』、『古本』の注釈書では、この男の仕事について、A系統の『験記』、『今昔』の鷹

取の男と同様に、鷹の子を取って売ることであると解釈されてきた。しかし、B系統の『宇治』や『古本』では、男が放鷹に鷹を用いていたとき、鷹が逃げてしまい、逃げた鷹を追って山奥に分け入り、偶然に谷の岸の木に別の鷹の巣を見つけたという。男は繁殖期を待ってから、「従者ども」を引き連れて巣の場所へ向かったが、自ら鷹の子を取ろうとして木に登ると、運悪く枝が折れて谷底へ転落してしまった。『宇治』の「鷹を役にて過る物」、『古本』の「鷹を役にて過ぐる物」は鷹を飼育調教して放鷹を行なっていたが、やはり日常的に鷹の捕獲、すなわち「鷹取」を仕事としていなかったと考えられる。

### 三 鷹取の男と「鷹飼」・「鷹生」の男

次にA系統の鷹取の男とB系統の鷹を役にて過ぐす男の生業・生活に関する説明箇所をもう少し詳しく比較したいと思う。

A系統の『験記』の冒頭では、「陸奥国有一人、姓名未詳、田獵漁捕、取鷹為業、常取上鷹、為活生謀」とあり、また、後半で「我常取鷹、献上国家、以其価直宛年々貯、今年既絶取鷹方術矣」とあるように、鷹取の男は、「田獵漁捕、取鷹為業」を生業としており、しかも特に「取鷹」（鷹を取る）の仕事に関しては、「常取上鷹」（常の上鷹を取る）の成果を上げて「為活生謀」（活生の謀と為す）としていたという。鷹取の男は具体的に「我常取鷹、献上

国家、以其価直宛年々貯」と述懐している。山間部における「田獵漁捕」（狩獵・漁撈）のみの生活であれば、基本的に貧しかったものと思われるが、「取鷹」の仕事は常に「上鷹」を「国家」へ献上して得た「価直」を毎年の貯えに宛てて自分の生活を助けていたという。鷹取の男は「国家」にとって必要とされた「上鷹」を探し出すような鷹の目利きであったというわけである。

同じA系統の『今昔』では、「今昔、陸奥国二住ケル男、年来鷹ノ子ヲ下シテ、要ニスル人ニ与ヘテ、其ノ直ヲ得テ世ヲ渡リケリ。」とあり、鷹の子を巢から下して売る仕事は変わらないが、「要ニスル人ニ与ヘテ、其ノ直ヲ得テ」いたとあるように、鷹を必要とする「人」へ売っていたという。「要ニスル人」は説話の後半部分で「国ノ人」とも書かれている。『今昔』の男が鷹の子を売って「直」（価直）を得ていたのは、『験記』の鷹取の男と同じであるのに、鷹の子を売る取引先が異なっていたことは、前述の通りである。

また、『験記』では鷹取の男の生業があくまで「田獵漁捕」を軸としつつ、「取鷹」をもう一つの軸としていたのに対して、『今昔』では鷹を取って「要ニスル人」、「国ノ人」へ売ることが「世ヲ渡」る手段、すなわち専業であったかのように書かれている。なお、崖の途中に取り残された男が、「我レ年来飛ビ翔ケル鷹ノ子ヲ取テ、足ニ緒ヲ付テ繫テ居ヘテ不放ズシテ、鳥ヲ令捕ム。此ノ罪ニ依テ、現報ヲ得テ、忽ニ死ナムトス。」と悔やんで、観音菩薩に祈っているが、男は自分の仕事を振り返り、鷹の子の足に絆を付けて繋ぎ

据えており、鷹の子を育てて鳥を取らせていたという。

『験記』の鷹取の男の「田獵漁捕、取鷹為業」と異なつて、『今昔』では、説話の最初に男が狩猟・漁撈を行なっていたことは書かれず、説話の後半部分で男自身が鷹の子を育てて放鷹に用い、鳥を取らせていたこと、すなわち狩猟していたことを述懐しており、鷹を飼育調教してから売っていたという設定になっている。男が鷹の子を育てて鳥を取らせていたという述懐を書くことで、狩猟中心に生活していたことを読み取らせるのであろう。

『験記』では、鷹取の男が鷹の子を取って「国家」へ献上しているのに対して、『今昔』では、鷹取の男が鷹の子を育てて鳥を捕らえるまで飼育調教してから「要ニスル人」、「国ノ人」へ売っていたと書かれていることを改めて確認できた。鷹の子の扱いが少し異なることも重要であるが、ここでは、『験記』や『今昔』のどちらにも、鷹取の男が鷹の子を取って取引先へ売ることに主眼が置かれていたことに留意しておきたい。

B系統の『宇治』と『古本』ではどうだろうか。『宇治』の冒頭に「今は昔、鷹を役にて過る物有けり。」とあり、彼自ら「かく鷹飼を役にて世をすぐせど」云々と語っている。『古本』では冒頭に「今は昔、鷹を役にて過ぐる物ありけり。」とあり、彼自ら「かくてぞ、鷹飼ふを役にて世を過ごせど」云々と語っている。『宇治』と『古本』ではほぼ同じ表現になっている。また、ささいな違いではあるが、『古本』では、男が「鷹飼ふを役にて」と述懐したの

に対して、『宇治』では、「鷹飼を役にて」とあつて、「ふ」の文字を省くことで「鷹飼」が役職名であるかのように書かれている。

これは単に『宇治』の写本の書写の段階で「ふ」の文字が脱漏したものとは考えられない。『古本』の「鷹飼ふを役にて」と『宇治』の「鷹飼を役にて」という相違は、『宇治』や『古本』の当該説話の題の違いと関連している。『宇治』や『古本』の当該説話の題をくらべてみると、『宇治』は「観音経化蛇身輔鷹生一事」、『古本』は「観音経変二化蛇身一輔鷹生一事」となっていて、やはり違いがある。『宇治』の題の「人」は本文中の「鷹飼を役にて」と対応し、『古本』の題の「鷹生」は本文中の「鷹飼ふを役にて」と対応している。この男が何者であるかという説明を、本文中で「鷹飼」と示した『宇治』と、題の中で「鷹生」と示した『古本』との違いである。「鷹生」とは、文脈からみる限り「鷹飼」と同義である(11)。

『宇治』や『古本』では、鷹を役にて過ごす者であるとか、「鷹飼」または「鷹飼ふ」を役にて過ごす者であつたというから、鷹の子を取ることよりも、鷹を飼って放鷹していたことに主眼が置かれているようである。そのことは、『宇治』冒頭の「今は昔、鷹を役にて過る物有けり。」に続いて、「鷹の放れたるをとらんとて、飛にしたがひて行ける程に」云々の箇所を示されている。

この箇所は、鷹を役にて過ごす男が山奥の谷の岸の木のの上に鷹の巢を見つける以前の状況を説明したところである。『宇治』、『古

本』の注釈書では、『験記』や『今昔』を念頭に想像しており、鷹が巣から離れて行ってしまったので、男は鷹が飛ぶにしたがって追いかけたと解釈することが多い。しかし、これは前述のように、男が放鷹を行っていた時のことを想定していると考えるべきであろう。その状況とは、男が放鷹をしていたところ、鷹が手元に戻らず、逃げてしまったため、その鷹が飛んでいくのを見ながら追いかけた、というものである。

男が放鷹の際に逃げられた鷹を追いかけたと考える、もう一つの重要なことがある。男が放鷹の際に逃げられた鷹と、山奥の谷で偶然見つけた巣を営む鷹は全く別の鷹であったことである。『宇治』に「鷹、巢のめぐりにしありく。見るに、えもいはずめでたき鷹にてあれば、子もよかるらんと思て、よろづも知らずのぼるに」云々とあるように、男が巢のあたりにいた親の鷹の「えもいはずめでたき」様子を見かけて、その「子もよかるらん」と判断していることから、男が偶然見つけた巣を営む親の鷹をじっくりと観察したのが、その時初めてであったことは確かである。男が鷹の子を取ることを仕事としていて、逃げた鷹を追いかけて新しい巣を見つけたというのであれば、その時に親の鷹を初めて見たなどというのはあり得ないわけである。男が巣を偶然見つけたに過ぎない状況であったことを考慮すると、彼が專業的に鷹の子を取っていた者であるとは言い難いと思う。

以上のことを踏まえて、A系統の『験記』や『今昔』の鷹取の

男と、B系統の『宇治』や『古本』の「鷹飼」、「鷹生」の男の特徵について考えてみよう。

『験記』、『今昔』の鷹取の男は、いつも彼一人で鷹の巣を探しており、鷹の子を取っていたことが読み取れる。鷹取の男は新たな巣の場所が危険な場所にあると知って、隣家の男に嘆いており、新しい巣の場所の危険性を十分に認識していた。そのため、鷹取の男は隣家の男による助言と協力を得て籠と縄と杵を用い、巢へ近づいて鷹の子を取ることができた（ただし、隣家の男に鷹の子を奪われた）、という話になっている。このことからみて、鷹取の男は集落の中に家を構えており、隣家の人間と日常的に交流していた、いわば庶民的な人物である。鷹取の男と隣家の男は同業者として読み取れるだろう。

一方、『宇治』、『古本』の「鷹飼」、「鷹生」の男は、そのような庶民的な人物として書かれていない。彼は「従者ども」を引き連れて、自分の元から逃げた鷹を探していたのであり、『験記』や『今昔』の鷹取の男よりも、若干高い身分に属した人物として位置づけられている。男は山奥で偶然、別の鷹の巣を見つけると、鷹の子を下ろす季節になるまで待って、再び巣の場所を訪れたが、「よろづも知らず」に木を登ろうとして、足を掛けた枝が折れてしまい、谷底へ向けて転落したのであって、鷹の子を取ることができなかった。男は、『験記』、『今昔』の鷹取の男と比較して無謀であり、巣を見つけてから、鷹の子を取りに行くまで十分な時間的余

裕があるにも拘わらず、明らかに鷹の子を取ることに慣れていなかった。どちらかといえば、彼自身は鷹の子を取って売ることを生業としていたわけではなく、別の人から鷹の子を入手して飼育調教する仕事に従事していたことがうかがえる。想像に過ぎないが、『今昔』でいう鷹取の男が鷹の子を売る相手であった鷹を必要としている人（「要ニスル人」、「国ノ人」）は、『宇治』や『古本』の「鷹飼」、「鷹生」の男のような人であったのではないだろうか。

さらに、『験記』、『今昔』の鷹取の男と『宇治』、『古本』の「鷹飼」、「鷹生」の男との間で明確に異なることは、彼らの生業・生活の場所である。『験記』、『今昔』の鷹取の男が陸奥国の住人であり、陸奥国内としていたのに対して、『宇治』、『古本』では、「鷹飼」、「鷹生」の男の居住地、放鷹の場所、鷹を探していた場所の具体的な国名・地名が書かれておらず、「鷹飼」「鷹生」の男が何処の何者であるかは明らかにしていない。「鷹飼」、「鷹生」の男が鷹の巣を見つけた場所は、はるかなる山奥の谷と設定しているから、日本各地の山間部の何処でもよいということになる。しかし、そうであればこそ、『宇治』、『古本』の読み手が比較的身近に感じられる「鷹飼」、「鷹生」の男を想像できるように、場所を特定していかない可能性があると思う。

以上のように、各説話の文中の細かな相違点に注目して、『験記』、『今昔』の鷹取の男と『宇治』、『古本』の「鷹飼」、「鷹生」の男が異なることを指摘してきた。A系統の各説話の男とB系統の各

説話の男は全くの別人と考えてもよいことが分かったので、A系統とB系統は同類異話の関係というべきである。

A系統とB系統の関係について、もう一つ付け加えると、A系統の説話をもとに、B系統の説話を作り上げたと考えられることである。まず、A系統の『験記』は崖のくぼみとしており、『今昔』は崖にかかる木の枝としていた。B系統の鷹の巣の場所は山奥の谷の岸の上であり、崖に生えた榎の木の枝であったとしているから、木の枝という『今昔』の設定を引き継いでいる。次に、男たちの鷹への関わり方である。A系統の各説話のうち、『験記』では、鷹取の男が鷹の子を「国家」へ献上していたと述べるが、『今昔』では、男が鷹の子を育てて鳥を取らせるまで飼育調教して「要ニスル人」、「国ノ人」へ売っていたと述べるため、『今昔』の男が飼育調教および放鷹に従事していたことは明らかである。これらのことから、男が「鷹飼」、「鷹生」であったと説明されているB系統の説話は、A系統のうち、特に『今昔』を参照して書かれたものと思われる。

同じテーマの類話が平安後期・鎌倉期に成立した複数の説話集に収録されており、平安後期以降の寺院の僧侶や貴族などの間で好まれていたことは、これまでも指摘されてきた。特に、A系統の唐招提寺蔵「取鷹母縁」（取鷹因縁）は、僧侶が『験記』をもとに説草として作ったものであることが知られている。C系統の金沢文庫本『観音利益集』三五も、A系統の『験記』の類話をもと

に説草として作られたものと推測されている。鷹取の男の観音靈驗譚に限らず、『験記』に収録された多くの説話が、寺院の説法・説教の素材になるように集められたということなら、説法・説教の対象は老若男女の違いも、身分の違いも関係なく幅広い範囲の人々を想定していたのであろう。

B系統の説話は、A系統と同じテーマの説話を取り入れてモチーフの改変を加え、おおむね仮名文字で書かれている。仮名文字でまとめられた説話集の写本を手にとって読めるような貴族社会の人々を想定して作られたと考えるべきであろう。陸奥国の鷹取の男の説話を採録せず、鷹を役にて過ごす男（鷹飼、鷹生）の説話を採録した理由は、B系統の説話を収めた説話集の読み手にとって比較的身近な存在が、陸奥国の鷹取の男よりも、「鷹飼」、「鷹生」の男であったことによるのではないかと考える<sup>(12)</sup>。

本稿では、平安後期・鎌倉期の複数の説話集にみえる鷹取の男の観音靈驗譚を取り上げ、各説話の前半部分を比較して、鷹取の男と「鷹飼」、「鷹生」の男の生業・生活の様子が少し異なっていることに注目してみた。少なくとも、鷹取の男の観音靈驗譚と呼べるのはA系統であり、B系統はどちらかといえば、鷹を役にて過ごす男（鷹飼・鷹生）の観音靈驗譚と呼べることも次第に分かってきた。各説話の間で鷹取の男や「鷹飼」、「鷹生」の男の生業・生活を説明するにあたって、細かな違いが生まれた理由について付言したい。説話の作者または説話集の編者が、説話の後半部分

までの経緯を説く前半部分を工夫する必要があり、説話の読み手や聞き手を意識して人物の設定を変更したということがある。そして、先行の説話を取り入れて表現の変更を行なうときには、鷹取や鷹飼を担う人々に対する認識の揺れがあったと思われる。説話の作者または説話集の編者が意識的に施した表現上の工夫から、鷹取や鷹飼を担う人々に対する認識の揺れを読み取れる場合もあったが、詳しく読み取って論じることは至難の業である。本稿では、類話の多い説話を取り上げたので比較して多少考えることができたともいえる。

各説話を比較して考えるなかで留意したいことは、鷹取や鷹飼を担う人々の生業・生活の実像である。各説話にみえる鷹取の男と「鷹飼」、「鷹生」の男の生業・生活が、単に表現上の問題にとどまらず、奈良・平安期の鷹取・鷹飼を担う人々の生業・生活の実像を考えるうえで参考になるのかという点であろう。まず、観音靈驗譚としては当然であるが、鷹取や鷹飼を担う人々の信仰のあり方について書かれていることが重要である。鷹取や鷹飼を担う人々が道心を発して生業を廃し、法師となるのが最善であったというわけであるが、その境地に至るまでは、日々の生業・生活を続けていくなかで重ねざるをえない罪の蓄積を軽減し、また、稀に起こる転落事故のような不測の事態を脱するため、観音経を毎月十八日に読誦して、観音菩薩を信仰することが奨励されていたのであろう。そのことは、各説話の間で共通する特徴として指

摘できる。

鷹取の男の生業・生活の具体的な状況は、主にA系統の説話が参考になる。毎年、鷹取の男が同じ鷹の巣から鷹の子を取って「国家」または鷹を必要とする人へ売り、価値を得たことはこれまで注目されてきたが、本稿で述べてきたことから、他にも次のような特徴がうかがえる。

・鷹取の男が山々峰々を歩いて鷹の巣を探し出すと、親の鷹を観察して鷹の子の良し悪しを判断していたこと。言い換えれば、雛を見ただけでは、雛を育てて放鷹で用いることに堪えるか否かを判断できないということでもある。

・鷹取の男が巣の場所を把握しておき、毎年の繁殖期を待つて鷹の子を取りに行っていたこと。つまり、毎年、優れた鷹を産んできた同じ鷹の巣から雛を獲得することで、次第に鷹の目利きとしての評判を獲得していたようである。

・鷹取の男が巣へ近づいて鷹の子を取る際は木登り、または崖下りを基本としていて、籠や縄などの道具を用いて工夫していたこと。鷹の巣は木の枝や崖など、人にとって近寄り難い場所に営まれるため、鷹の巣から雛を取る仕事では、しばしば危険を伴った。

鷹取の男は種々の道具を用いて十分な備えをしたうえで作業に臨んでいた。

B系統の「鷹飼」、「鷹生」の男の生業・生活の状況は、A系統の鷹取の男の生業・生活と比較して明確になってきたことである。

「鷹飼」、「鷹生」の男の生業・生活の状況を考えるうえで参考になる特徴は、次のようなことであろう。

・「鷹飼」、「鷹生」の男が「従者ども」を連れて鷹を探していたこと。「鷹飼」、「鷹生」の男は「従者ども」を連れていたことから、鷹取の男よりも若干高い身分であったと考えられる。

・「鷹飼」、「鷹生」の男が日常的に巣から鷹の子を取って売る仕事に従事していた様子は説話から読み取れないこと。「鷹飼」、「鷹生」という表現を重視すると、「鷹飼」、「鷹生」の男は、鷹の子を育てて飼育調教する仕事に従事していたと思われる。

・「鷹飼」、「鷹生」の男が自ら鷹の子を巣から取ることもあったようだが、鷹の子を取ることに慣れていなければ、十分な準備をしないまま、谷の岸の木に登って転落したこと。転落事故の発生の状況から考えると、「鷹飼」、「鷹生」の男は、巣から鷹の子を取ることが少なく、おそらく鷹取の男のような人から入手した鷹の子を飼育調教していたものと推測される。

稿を改めて別の説話や各種の史料も用い、奈良・平安期の放鷹を支えた鷹取・鷹飼の生業・生活の一端を明らかにしていきたいと思う。

#### 【註】

(1) 拙稿「日本古代の放鷹の技術と形象に関する覚書（その

四)「餌取法師往生説話から」(『八洲学園大学紀要』第一五号、二〇一九年)。

(2) 弓野正武「古代養鷹史の一側面」、竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『律令制と古代社会』、東京堂出版、一九八四年。

(3) 森正人「聖なる毒蛇／罪ある観音―鷹取救済考―」、『国語と国文学』第七六卷第一二号、一九九九年一二月。

(4) 唐招提寺蔵「取鷹俗母縁」は、山本秀人・宇都宮啓吾「唐招提寺蔵片仮名文説話三種 影印・翻刻並に解説―「取鷹俗母縁」「役行者悲母事」「桃華因縁」―」、鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究第二十一輯』、武蔵野書院、平成一〇年による。金沢文庫本『観音利益集』は、近藤喜博校『中世神仏説話 古典文庫第三十八』、古典文庫、一九五〇年による。

(5) 『大日本国法華経験記』卷下・第一一三、奥州鷹取男は、井上光貞・大曾根章介校注『往生伝 法華験記 日本思想大系7』、岩波書店、一九七四年の原文(五六一―五六二ページ)による。

(6) 『今昔物語集』卷十六・第六、陸奥国鷹取男依観音助存命語は、馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集② 新編日本古典文学全集三六』、小学館、二〇〇〇年による。山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『今

昔物語集三 日本古典文学大系二四』、岩波書店、昭和三六年、池上洵一校注『今昔物語集三 新日本古典文学大系三五』、岩波書店、一九九三年も参照した。

(7) 『宇治拾遺物語』上・八七、観音経化レ蛇輔レ人給事は、三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語・古本説話集 新日本古典文学大系四二』、岩波書店、一九九〇年による。大島建彦校注『宇治拾遺物語 新潮日本古典集成』、新潮社、一九八五年も参照した。

(8) 『古本説話集』下・六四、観音経変ニ化蛇身一輔ニ鷹生一事は、三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語・古本説話集 新日本古典文学大系四二』、岩波書店、一九九〇年による。高橋貢『古本説話集全註解』、有精堂出版、一九八五年も参照した。

(9) 「鷹の放れたるをとらんとて」の解釈に関しては、『宇治拾遺物語・古本説話集 新日本古典文学大系四二』に、『宇治』上・八七、観音経化レ蛇輔レ人給事と『古本』下・六四、観音経変ニ化蛇身一輔ニ鷹生一事の両説話を収録しているの  
で参照すると、A系統の『験記』や『今昔』を念頭に置いて読み解いているようである。『宇治』上・八七、観音経化レ蛇輔レ人給事は、一五九ページ脚注二四に「巢から離れた鷹。巢から飛び立った鷹」と解し、『古本』下・六四、観音経変ニ化蛇身一輔ニ鷹生一事は、四九四ページ脚注二に「鷹



の逃げたのを捕ろうとして。今昔は親鷹が例年の所に営巢しなかったので山中をさがし求めて見付けたとする」と解している。しかし、本稿のように、A系統の『験記』や『今昔』を強く意識せずに理解することができると思う。本稿に近い解釈は、『古本説話集全註解』、三二一・三二二ページにもみえるが、男がA系統の鷹取の男と同様の仕事に従事していたと想定されているところは、他の注釈書と変わらない。ただし、放鷹の際に鷹が逃げたという状況に限定せず、繋いでいた鷹が逃げたという状況であると解釈している。

(10) 『験記』や『今昔』を参照して簡略的にまとめられたと思われる『観音利益集』三五の鷹取の男の観音靈験譚では、鷹の雛を巢から下ろす仕事について、「栖ヲロシ」(巢下ろし)と呼ばれていた。「栖ヲロシ」の仕事の具体的な状況に關しては、『観音利益集』三五に「白雲ノカ、ルホトノ岩ホノ上ニ、ナケクハカリナル所ニ、タカノ栖ヲカケタリ、是ヲ取ラムトテ籠ヲクミテ登リテ、上ヨリ縄ヲサケテ伝ヒヨリケルホトニ、イカ、シタリケム、縄キレテワツカニ岩ノカトニカ、レリ、」とある。鷹取の男は「岩ホ」(巖)の「タカノ栖」へ近づくため、籠を組んで「岩ホ」を登り、その上から縄を下げて伝い降りたが、何故か縄が切れてしまい、「岩ノカト」(岩の角)に引っかかったという。この中にみ

える「籠」は、男が乗り込むものではないため、男一人が背負えるものであると考えるのが妥当であろう。籠の作り方が「籠ヲクミテ」云々とあることから、竹や蔓を組んで作った目籠であろうか。この説話では「隣人型」のモチーフを採用せず、鷹取の男が一人で籠を持ち、縄を伝い降りて「タカノ栖」へ近づいており、縄が切れて転落したことは偶発的な出来事とする。偶発的に縄が切れたということは、A系統の説話に登場する隣家の男が鷹取の男の転落事故を偽って、鷹取の男の妻子に告げたときの原因と同じである。A系統の説話では、隣家の男が告げた偶発的な原因は偽りであったが、C系統の説話では鷹取の男の転落事故の原因として説いていることになる。

(11) 「鷹生」という呼称は、律令体制下の官職制度の中で知識・技術を継承する仕組みに關係しているかのようである。「一生」は、特殊な知識・技術に基づく業務を求められた官司に所屬して、知識・技術を学ぶ側の人を意味する名称である。大学寮の学生・算生、雅楽寮の舞生・楽生、典薬寮の医生などが設定されていた。しかし、律令体制下の主鷹司や九世紀以降の藏人所鷹飼の組織に「鷹生」が所屬していたことは史料上に確認できていない。「鷹生」を後代に鷹飼の意味で用いられた「鷹匠」と同義と考える見方もあるようだが、「鷹匠」との関連性は今後の課題である。

(12)

B系統の「鷹飼」、「鷹生」の男が放鷹の際に逃げた鷹を探すというモチーフは、『万葉集』の家持歌で知られていたものである。奈良中期の越中守大伴家持に仕える養吏の老人が、鷹を飼育調教した際に逃げられ、その鷹を探していたことを思い起こさせるから、平安期の貴族社会では馴染みの深いモチーフであったのだろう。

(受理日…二〇二〇年三月二七日)